

二日間の命

筑後市立羽犬塚中学校3年 虻川 綴

「お父さんが倒れた。」

その言葉を聞いたのは私が九歳になったばかりの頃です。友達と遊んでいた私を祖母が迎えに来てくれ、病院に向かう車内でそう聞かされました。父は当時三十九歳。九歳の小さな脳では、事の重大さを把握することが出来ず、今日入院したりするのかな、なんて悠長なことを考えていました。

しかしその二日後、父は息を引き取りました。二日前、初めて病院を訪れ父の姿を見たとき、意識こそは無かったものの確かにそこに父は生きていました。それでも、二日後の私の目の前に居る父は息をしていないのです。こうもあっさりしたものなのかと、涙でぼやける視界の中、そう思いました。

その後、私は母と沢山の話をしました。その中で母はこう言うのです。

「もう少し運ばれるのが遅かったら、初日に綴が来る前にもうダメだったかもしれなかったんだよ。」

父が倒れた際、父の会社の方がすぐに救急車を呼んでくださったからこそ存在したあの二日間だったのだと親子二人で感謝したのを覚えています。

それと同時に私の中には疑問が生まれました。救急車ってお金かかるのかな、と。私はその時初めて税金によって救急車を無料で呼ぶことが出来るのだと知りました。調べてみると、ある国では十四から十六万円ほど搬送料金がかかるそうです。それもたった一度の搬送にかかる料金です。また、搬送距離やその際の処置によって追加料金も発生するようで、日本のようにすぐに救急車を呼べず病院につくころには手遅れだった、というケースも少なからず存在しています。世界でそんな悔しい思いをする方がいる中、父は身近な方々はもちろん、税金を払う沢山の人のおかげで二日間もその命を延ばすことが出来ました。きっとこの二日間が無ければ、私は父の最期を看取ることは出来ていなかったでしょう。もしあの場に立ち会えていなかったら、そう思うとゾッとします。たった二日、されど二日です。あの二日間が私達家族に覚悟をくれたのだと思っています。救急車が無料で呼べる、そんな、税金があるからこそあるこの当たり前に私はとても感謝しています。

世の中、沢山の税金で成り立っている一方、年々その額が増えているのも事実です。それでもその税金が日本のどこかで誰かの助けとなっています。そして巡り巡っていつか自身を助けてくれるものともなるのです。

「誰かの役に立つ仕事に就きたい。」

そんな言葉をよく耳にしますが、どんな仕事でも税金という形で必ず誰もが誰かの役に立っています。少なくとも私は助けられた一人です。時々、税金の問題がニュースや新聞で取り上げられますが、私は、きっとこの税金が誰かの役に立ってくれる、そう信じてこれからも税金と向き合っていきたいです。